その他

山田原欽「博約堂詩艸」翻刻・訳注

鎌田　出*1

山田原欽「博約堂詩艸」※について

山田原欽（1666～1693）の著作については、渡辺憲司「山田原欽の前半生　近世初期文壇との交遊」[註1)]に簡潔にまとめられているが、「博約堂詩艸」への言及は無い。「博約堂詩艸」に関しては、安藤紀一『山田原欽』[註2)]に、原欽の雅号に関する記述の注記として次のような言及がある。

> 原欽の延宝八年春の頃、自作詩数首を書したる一巻を見しに、博約堂詩艸と題し、その末尾に、延宝庚申春博約堂人山田言歆把毫洛下時十有五と識し、その印に習軒字仲昭の文あり。されば、そのころは、名を言歆とし字を仲昭とし、且つ習軒、博約堂などの堂号を用ひしが。

所収作品については何も述べられておらず、安藤氏が「博約堂詩艸」を何時目にしたかも定かでない。それだけに、氏の没後約百年の歳月を経て「博約堂詩艸」の存在を確認出来たことは、まさに僥倖であった。

現在、山田原欽のまとまった漢詩集としては『復軒詩藁』[註3)]が存在するのみだが、「博約堂詩艸」に所収される漢詩16首のうち5首は未所収である。また、所収されるものにも文字の異同がある。「博約堂詩艸」は、若き日の山田原欽の詩作を知る上で貴重な資料と言えよう。

※「博」は「博」の俗字、「艸」は「草」の略字であるが、巻名には原文の表記をそのまま用いた。

［凡例］

本稿は、個人所蔵の山田原欽手稿本「博奕堂詩艸」の翻刻と訳注である。作成に際し以下に従った。

1．所収される詩には通し番号を付し、それぞれ①本文及び書き下し文、②校異、③語釈、④現代語訳、⑤備考の順で記した。

2．原文の序には㊀、詩題には㊁、また詩の各句には❶～❽の句番号を付し、校異・語釈との対照の便を図った。

3．翻刻に当たり、正字に統一することはせず、記された字体をそのまま採用した（例えば、「尽（盡）」、「対（對）」、「観（觀）」など）。ただし、異体字・俗字・略字[註4)]は原則として正字に改め、必要に応じて校異で言及した。

5．校勘には『復軒詩藁』を用い、校勘結果にかかわらず文字の異同は全て校異に記した。また、『復軒詩藁』以外の資料を用いた場合は、その旨を校異に記した。

4．書き下し文は、語釈も含めて、全て新字表記・現代仮名遣いとした。

1．士峯詩　并序

①原文及び書き下し文

> 士峯者蓋山嶽之神秀而天下之奥區也。赤人之歌、宋濂之曲、永垂于編冊。浅間之垂跡、神女之双舞、長著于史簡。寔児童走卒之所其識、神仙道人之所窟宅也。予渇望已久、偶因辟赴于江都。道過山下吟賞之餘賦一律云

士峯は蓋し山嶽の神秀にして天下の奥区なり。赤人の歌、宋濂の曲永く編冊に垂る。浅間の垂跡、神女の双舞、長く史簡に著わす。寔（まこと）に児童走卒の其

*1　至誠館大学　ライフデザイン学部

れ識る所、神仙道人の宅を窟する所なり。予渇望すること已に久くして、偶（たまたま）辟に因りて江都に赴く。道山下を過ぎ、吟賞の餘一律を賦して云う

㊗士峯詩　序を并せる

❶危層入天半　危層　天の半ばに入り

❷勝景出塵寰　勝景　塵寰を出づ

❸松茂三保浦　松は茂る三保の浦

❹草長清見關　草は長し清見の関

❺峯頭千古雪　峯頭　千古の雪

❻脚底四邊山　脚底　四辺の山

❼安到絶高處　安（いずくん）ぞ絶高の処に到り

❽一望宇宙間　宇宙の間を一望せん

②校異

㊍安藤紀一『山田原欽』（45 頁）は「序」を「龍山詩集」より引き、「其」を「共」に、「過」を「経」に作る。

㊍原文は「垂」を異体字「垂」に作る。

㊗『復軒詩藁』は「詩峯」に作る。

❹『復軒詩藁』は「草」を略字「艸」に作る。

③語釈

㊗「士峯」…富士山。藤原惺窩「富士山二首　其一」（『惺窩先生文集』巻之 3）に「遠為士峯成此遊、吟眸処処幾回頭（遠く士峯の為に此の遊を成す、吟眸処処幾（いくばく）か頭を回らさん）」とある。

㊗「奥區」…国の中央。

㊍「赤人」…万葉の歌人、山部赤人。「田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にそ　富士の高嶺に　雪は降りける」の歌で知られる。

㊍「宋濂」…明代初期の文人。字は景濂。『宋学士全集』（巻 32）に載せる「日東曲十首　其三」に「絶入層霄富士岩、蟠根直圧三州間、六月雪花翻素　毳、何処深林覓白鵰（絶して層霄に入る富士の岩、蟠根直ちに圧す三州の間、六月雪花素毳を翻し、何れの処の深林か白鵰を覓む）」とある。

㊍「浅間」…富士山を神格化した浅間大神。富士山本宮浅間大社の語由緒[註 5)]に拠れば、富士本宮浅間神社の主祭神は大山祇神の御息女で瓊瓊杵尊の皇后となった木花之佐久夜毘売命（別称、浅間大神）である。

㊍「垂于編冊」…「編冊」は書物。書物によって伝えられる。

㊍「垂跡」…菩薩が人々を救うためにこの世に現れること。ここでは浅間大神の顕現を言う。

㊍「神女」…本来「女神」の意だが、以下に「双舞」とあることから、三保の松原を舞台とする能の演目の一つ「羽衣」の「天人」（天女）を言う。

㊍「走卒」…使い走り。下男。

㊍「辟」…君主からの呼び出し。辟名。

㊍「江都」…江戸

❶「危層」…そそり立つ高楼。ここでは富士山を言う。

❷「塵寰」…けがれた人間世界。塵俗。

❸「三保浦」…静岡県静岡市清水区の入海。現在の三保の松原辺りを言う。『万葉集』（巻 3）に載せる田口益大夫の歌に「廬原の清見（浄見）の崎の三保の浦のゆたけき見つつもの思ひもなし」とある。

❹「清見関」…静岡県静岡市清水区興津にあった関所。南に三保の松原を望む場所に位置する。

❹「脚底」…足元。富士山の裾野を言う。

❺「千古」…遠い昔。

④現代語訳

富士山は、思うに高い山の中でもとりわけ秀でており日本国の中央にある。山部赤人の和歌、宋濂の詩は書物に記され長く伝えられている。浅間大神の顕現、天女羽衣の舞は、長く歴史書に記されている。実に子どもから下男までも知っており、仙人や隠者が住まうところである。私はかねてより富士山を観

ることを望んでいたが、たまたま世子様よりの御命令で江戸に赴くことになった。旅の途中富士山の麓にさしかかり、愛で歌ったのちに律詩一首を作り言う

そそり立つ山は空の半ばに及び
美しい景色は塵俗を離れている
三保の浦は松が茂り
清見の関は草が伸びる
山頂には遠い昔の雪が積もり
裾野は山々に囲まれている
どうにかしてこの絶頂に至り
世界を一望したいのだが

⑤備考

『復軒詩藁』「己未延宝七年　時年十有四」に同詩を載せるが、序文を欠く。

『復軒詩藁』同年所収の作の詩題に「世子召臣臣以十一月十一日就途至大津」とある如く、延宝七年十一月に原欽は世子（後の三代藩主吉就公）の辟命で初めての東行の途に就く。「士峯」は、その途中で眺めた富士山を詠んだもの。

２．途中逢冬至

①原文及び書き下し文

㊗途中逢冬至　途中冬至に逢う

❶露餐風宿十餘日　露に餐し風に宿し十餘日
❷客舎又逢冬至時　客舎又冬至の時に逢う
❸憶得京城静居裏　憶い得たり京城静居の裏
❹閉關獨自写新詩　関を閉ざし独り自ら新詩を写す

②校異

㊗『復軒詩藁』は「到武府之前一日冬至廿一日述思」に作る。

❶原文は「餐」を「飧」（「飧」の俗字）に作る。「飧」は「餐」の異体字。『復軒詩藁』は「露餐風宿」を「風飧露宿」に作る。

❷『復軒詩藁』は「京城静居裏」を「去年京洛裏」に作る。

❹『復軒詩藁』は「獨自」を「寂寞」に作る。

③語釈

❶「露餐風宿」…「餐」は食事の意。旅の苦労を言う「餐風宿露」の語順を入れ替えた表現。宋・范成大「元日」（『石湖詩集』巻25）に「飢飯困眠全体懶、風餐露宿半生癡（飯に飢え眠に困しみ全体懶し、風に餐し露に宿り半生癡たり）」とある。

❶「十餘日」…『復軒詩藁』「己未延宝七年　時年十有四」に載せる「世子召臣臣以十一月十一日就途至大津」より、原欽が京都を出発して大津に至ったのが11月11日。『復軒詩藁』「到武府之前一日冬至廿一日述思」に「廿一日」とあり、京都を出発しておよそ10日後に冬至を迎えている。

❷「冬至」…『復軒詩藁』「到武府之前一日冬至廿一日述思」よりこの年の冬至が11月21日であったことが知られる。

❹「閉關」…門を閉ざし世間との交流を断つこと。

④現代語訳

露や風に苦しむ十日余りの旅で
宿にあって冬至を迎えた
思えば京都での静かな暮らしは
世間を離れて一人新しい詩を写していた

⑤備考

『復軒詩藁』「己未延宝七年　時年十有四」、「士峯」の次に載せる。

３．冬望

①原文及び書き下し文

㊗冬望　冬に望む

❶雪後眺望對暮風　雪後の眺望暮風に対す

❷満眸物色朗吟濃　満眸の物色朗吟に濃（こまやか）なり

❸玉山瓊樹一般景　玉山の瓊樹一般の景

❹只在騒人詩思中　只だ騒人詩思の中に在り

②校異

❹原文は「騒」を俗字「騒」に作る。

③語釈

❷「満眸」…目の届く限り。宋・釈覚範「興闌」（『石門文字禅』巻 9）に「春晩忽凭檻満眸、佳景来鴨頭波蕩（春晩　忽ち凭る檻は満眸、佳景鴨来たる頭は波蕩）」とある。

❷「物色」…景色。杜甫「雨四首　其三」（『杜詩詳註』巻之 20）に「物色歳時晏（く）、天隅人未帰（物色歳時晏れ、天隅人未だ帰らず）」とある。

❷「濃」…十分であること。ここでは景色が詩を詠むにふさわしいことを言う。原欽十一歳の作「游相国寺」詩に「池有荷葉庭松樹、一歩一歎風景濃（池に荷葉有りて庭には松樹、一歩一歎風景濃なり）」とある。

❸「玉山」…雪化粧の山を言う。唐・杜牧「奉和僕射相公春沢稍愆聖君軫慮嘉雪忽降品彙昭蘇即日書成四韻」（『全唐詩』巻 524）に「銀闕双高銀漢裏、玉山横列玉墀前（銀闕双び高し銀漢の裏、玉山横に列なる玉墀の前）」とある。

❸「瓊樹」…美しい樹木。

❸「一般」…ここでは「一様に」の意。唐・杜荀鶴「将過湖南経馬当山廟因書三絶　其三」（『唐風集』巻 3）に「九江連海一般深、未必船経廟下沈（九江海に連なり一般に深し、未だ必ずしも船廟下を経て沈まず）」とある。

❹「騒人」…「楚辞」の作者である屈原や宋玉のような憂愁を歌う詩人・文人のこと。李白「古風五十九首　其一」（『李太白集注』巻 2）に「正声何微茫、哀怨起騒人（正声何ぞ微茫たる、哀怨騒人より起こる）」とある。

❹「詩思」…詩情・詩興。『全唐詩話』（巻 5「鄭綮」）に引く『古今詩話』に、詩作について問われた鄭綮が「詩思在灞橋風、雪中驢子背上（詩思は灞橋の風、雪中の驢子背上に在り）」と詩作の苦労を述べた故事を載せる。

④現代語訳

雪の降った後、遠くを眺めていると暮の風が吹いている

目の届く限りの景色は詩を詠むにふさわしい

雪化粧の山と美しい木々の景色は

すべてはただ詩人の詩想の内にある

⑤備考

『復軒詩藁』未所収。

４．冬夜讀書

①原文及び書き下し文

㊐冬夜讀書　冬の夜に書を読む

❶火燼柴爐風氣寒　火は柴炉に燼（つ）きて風気寒し

❷唔咿聲裡夜曼〻　唔咿（ごい）の声の裡　夜曼々たり

❸可憐學牖一堆雪　憐れむ可し　学窓一堆の雪

❹助得儒生青史看　助け得たり儒生青史の看を

②校異

❹原文は「得」を異体字「淂」に作る。

③語釈

❶「柴爐」…暖をとるための炉。南宋・林亦之『網山集　三』（『両宋名賢小集』巻 183　所収）に載せる「挽曹不占二首　其一」に「為報歳寒同社客、今年不要作柴爐（為に報ず歳寒同社の客、今年柴爐を作るを要（もと）めず）」とある。

❷「唔咿」…本を読む声。清・張潮『虞書新志』（巻 1「姜貞毅先生伝」）に「公時九歳、与兄圻夜読、書声咿唔不絶（公時に九歳、兄圻と夜読む、書声咿唔として絶えず）」とある。

❷「曼曼」…長く続く様。司馬相如「長門賦」（『六臣註文選』巻 16）に「夜曼曼其若歳兮、懐鬱

鬱其不可再更（夜曼曼として其れ歳の若く、心鬱鬱として其れ再び更うからず）」とあり、呂延済の注に「曼曼若歳言夜長也（曼曼若歳、夜の長きを言うなり）」とある。

❸「可憐」…深い感動を表す。「驚くべきだ・羨ましい・愛らしい・あわれだ」等の意。

❸「学牖一堆雪」…晋の孫康が雪明りで勉学に励んだ故事を踏まえる。『蒙求集註』（巻上）の「孫康映雪」に「康家貧無油。常映雪読書（康、家貧しくして油無し。常に雪に映（て）らして書を読む）」とある。「學牖」は学問をする所。学校。

❹「儒生」…「生」は「書生」の「生」に同じで学ぶ者を言う。ここでは儒学を学ぶ徒である原欽自身を指す。

❹「青史」…歴史書。「青」は、青竹を火であぶり文字を記した竹簡を表す。

④現代語訳

柴炉の火は消え風が冷たい
朗読の声の中、夜は長い
何ということだ、学び舎の雪明りが
一書生の私が史書を読むことを助けてくれる

⑤備考

『復軒詩藁』未所収。

5．雪

①原文及び書き下し文

㊗雪

❶嚴風昨夜寒至骨　厳風の昨夜　寒さ骨に至る
❷飛雪今晨自整斜　飛雪の今晨　自（おのずか）ら整斜
❸青雀門前總鵁鶄　青雀門前　総（じ）て鵁鶄
❹更無一物似寒鴉　更に一物の寒鴉に似たる無し

②校異

㊗『復軒詩藁』は「大雪」に作る。

❶『復軒詩藁』は「至」を「臻」に作る。

❸『復軒詩藁』は「青雀門前」を「青鳥過檐」に作る。

③語釈

❷「整斜」…整っていたり傾いていたり。ここでは雪が不規則に積もっている様を表す。宋・劉一止『苕溪集』（巻 2）に「整整斜斜村舍居、十十五五沙中鳧（整整斜斜たり村舎の居、十十五五たり沙中の鳧）」とある。

❸「青雀」…舟を言う。庾信『庾子山集』（四庫全書版　巻 4）に載せる「奉和濬池初成清晨臨汎」に「時看青雀舫、遥逐桂舟廻（時に看る青雀の舫、遥かに逐う桂舟の廻）」とあり、倪璠の注に「穆天子伝曰、天子乗鳧。郭注云、舟為鳧形、今之青雀舫即其遺象也（穆天子伝に曰わく、天子鳧に乗る。郭注に云う、舟鳧形を為す、今の青雀舫即ち其の遺象なり）」とある。

❸「鵁鶄」…「鵁」は、水鳥の鵜の類。鸕鷀。『爾雅』（釈鳥第十七）に「鶿鵜　即鸕鷀也。觜頭曲如鈎。食魚（鶿鵜　即ち鸕鷀なり。觜頭曲ること鈎の如し。魚を食す）」とある。ここでは「鶄」と共に鵜の類の水鳥を言う。

❹「寒鴉」…慈烏。カラスの子は成長すると親鳥に食べ物を口移しに与えて恩を返すことからこう呼ばれる。『本草綱目』（巻 49　禽之三「慈烏」に「時珍曰〈中略〉北人謂之寒鴉（時珍曰く〈中略〉北人之を慈鴉と謂う）」とある。魚を獲り食す鵜に対比させた表現。

❹「更無」…「決して～ない」という強い否定を表す。

④現代語訳

厳しい風の吹いた昨夜、寒さが骨に凍みた
雪が風に舞う今朝、雪は自然あちこちに積もっている
船着き場にいるのは魚を獲る鵜ばかり
親孝行の寒鴉は一羽もいない

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

６．竹軒對雪

①原文及び書き下し文

㊗竹軒對雪　竹軒にて雪に対す

❶隱處尋常避利名　隠処は尋常利名を避く

❷竹軒索寞協幽情　竹軒は索寞として幽情に協(かな)う

❸微吟静對風窓雪　微吟　静かに風窓の雪に対せば

❹一般詩思人骨清　一般の詩思　人は骨清し

③語釈

❶「隱處」…俗世間を避けて隠れ住む場所。

❷「竹軒」…竹林にある家で、隠者の住まいを言う。宋・黄庶「竹軒」（『伐壇集』巻上）に「開書讀對聖賢語、一畝清風為主人（書を開き読みて聖賢の語に対す、一畝の清風主人と為す）」とある。

❷「索寞」…物寂しい様を表す畳韻語。

❷「協幽情」…「協」は「かなう・調和する」意。「幽情」は、奥深く高雅な心。俗世間の名利を離れた心にかなう。

❸「風窓」…風の吹く窓。『万首唐人絶句』（巻 59）に載せる唐彦謙「竹風」に「竹映風窓數陣斜、旅人愁坐思無涯（竹は風窓に映じて数陣斜めなり、旅人愁い坐して涯無きを思う）」とある。

❹「一般」…「３．冬望」参照。

❹「詩思」…「３．冬望」参照。

❹「骨清」…性質に俗気が無いこと。杜甫「別李義」（『杜詩詳註』巻之 21）に「爾克富詩礼、骨清慮不喧（爾克く詩礼に富み、骨清くして慮(おも)い喧(かまびす)しからず）」とある。

④現代語訳

隠処は常々名誉や利益を避ける場所

竹藪の住まいの物寂しさは私の心に叶っている

小声で詩を吟じながら窓の外の雪に向かえば

どの詩想も人には俗気がない

⑤備考

『復軒詩藁』未所収。

７．宿山寺

①原文及び書き下し文

㊗宿山寺　山寺に宿す

❶上來山徑尽　上り来たれば山径尽き

❷望眼靄煙分　望眼すれば靄煙分かる

❸僧院停藜杖　僧院　藜杖を停め

❹龍池観水紋　龍池　水紋を観る

❺紺林數対月　紺林は数(しばしば)月に対し

❻丹壑坐看雲　丹壑は坐(そぞろ)に雲を看る

❼可愛無人境　愛す可し　無人の境

❽逍遙麋鹿群　逍遥たり麋鹿の群

②校異

❷『復軒詩藁』は「煙」を「烟」に作る。

❸『復軒詩藁』は「藜」をたけかんむりに作るが誤りであろう。

❺『復軒詩藁』は「數」を「閑」に作る。

❼『復軒詩藁』は「可」を「更」に作る。

③語釈

❷「靄煙」…「靄」と「煙」は、共に「もや」の意。清の『御製詩五集』（巻 64）に載せる「題崔彦輔渓山烟靄図九畳前韻」に「渓山色也靄烟空、空色胥帰幻則同（渓山の色や靄烟の空、空の色は胥(み)な幻に帰すれば則ち同じからん）」とある。「烟」は「煙」の異体字。

❸「藜杖」…アカザの茎で作った杖。老人用の軽い杖。

❹「龍池」…唐・玄宗の故宅にあった池の名が知られるが、ここは単なる池の名。唐・孟郊「遊終南龍池寺」（『孟東野詩集』巻 4）に「龍在

水長碧、雨開山更鮮（龍在りて水は長（とこしえ）に碧に、雨開きて山は更に鮮かなり）」とある。

❺「紺林」…濃い青色の林。『石倉歴代詩選』（巻384）に載せる明・陳贄「遊少林寺」に「歩入招提境、鐘声出紺林（歩みて招提の境にれば、鐘声紺林より出づ）」とある。

❻「丹壑」…赤色がかった谷。杜甫「冬至」（『杜詩詳註』巻之21）に、「杖藜雪後臨丹壑、鳴玉朝来散紫宸（藜を杖つきて雪後丹壑に臨み、玉を鳴らして朝来紫宸に散ず）」とある。

❽「逍遙」…気ままにさまよう。

❽「麋鹿」…オオジカやシカ。ここは蘇軾の「前赤壁賦」（『東坡集』巻2）の隠者の日常を描く「侶魚蝦而友麋鹿（魚蝦を侶とし麋鹿を友とす）」の一節を踏まえる。

④現代語訳

登ってくれば山路は尽きて
遠くを見やればあちらこちらに靄がかかっている
僧院に杖をやすめ
龍池の水紋を観る
青々とした林の中でしばしば月に向かい
紅く染まった谷で何となく雲を眺める
いとしいのは俗人がいないこの場所で
気ままにさまよう麋鹿たちだ

⑤備考

『復軒詩藁』「己未延宝七年　時年十有四」に載せる。

８．即興

①原文及び書き下し文

㊐即興

❶羽檄一飛君命重　羽檄一飛　君命重し
❷東來忘却路程長　東のかたに来たれば路程の長きを忘却す
❸京城遊學賤微客　京城遊学賤微の客
❹今日拜観威徳光　今日威徳の光を拝観せり

②校異

㊐『復軒詩藁』は「入武府拜謁世子十一月廿六日」に作る。

❸『復軒詩藁』は「遊」を「游」に作る。

❹『復軒詩藁』は「観」を「望」に作る。

③語釈

㊐「即興」…興にまかせて作った詩であることを言う。

❶「羽檄」…緊急時に兵を集めるための触れ文。ここでは世子（後の吉就公）からの招聘を言う。「山田原欽先生事蹟」（『長周叢書』所収）に、「延宝七年己未年十四歳之時、京師ニ罷居候処ニ吉就公御側新規ニ被召出候。故京都ヨリ東武ニ罷越」とある。

❸「賤微」…身分が低いこと。原欽が自身を謙遜した表現。

❹「威徳」…威圧と恩徳。あめとむち。『管子』（巻15）に「重愛曰失徳、重惡曰失威（愛を重んずるを失徳と曰い、悪を重んずるを失威と曰う）」とあり、房玄齢の注に「君随臣愛悪即威徳皆在於臣、故曰失也（君臣に随いて愛悪すれば即ち威徳皆臣に在り、故に失と曰うなり）」とある。ここでは世子に召された悦びと、それに伴う責任の重さとを言う。

④現代語訳

飛ぶように届いた御触れ文、世子様のお召しは重責である
はるか江戸まで馳せ参じたが、道程の長さなど忘れてしまった
京都に遊学させていただいていた卑賤の私が
今日は威厳と恩寵の輝きを拝している

⑤備考

『復軒詩藁』「己未延宝七年　時年十有四」に載せる。
延宝七年十一月二十六日、原欽は初めて世子に謁見した。

９．庚申武城元旦

①原文及び書き下し文

㊗庚申武城元旦　庚申武城の元旦

❶半夜東風窮臘尽　半夜の東風　窮臘尽き

❷武城物色入三朝　武城の物色　三朝に入る

❸檐前日照梅先白　檐前に日照らせば梅先ず白く

❹墻外暖帰雪自消　墻外に暖帰れば雪自（おのずか）ら消ゆ

❺盃酒薦新醺宿酒　杯酒は新を薦めて宿酒に醺（そま）り

❻盤花献寿頌春椒　盤花は寿を献じて春椒を頌（たた）う

❼樗材非是斗山徳　樗材は是れ斗山の徳に非ず

❽飽受君恩雨露饒　君恩　雨露の饒（めぐみ）を飽受す

②校異

㊗『復軒詩藁』は「武城元日」に作る。

❸『復軒詩藁』は「先」を「光」に作るが誤りか。

❺『復軒詩藁』は「盃酒」の「酒」を「味」に作る。

③語釈

㊗「武城」…江戸。

❶「東風」…東から吹いてくる風。春風。

❶「窮臘」…陰暦十二月の別名。年の暮れを言う。

❷「物色」…「３．冬望」参照。

❷「三朝」…年・月・日の始まりの意で、一月一日元旦を言う。

❺「宿酒」…二日酔い。

❻「春椒」…春のはじかみ。山椒。唐・崔日用「奉和人日重宴大明宮恩賜綵縷人勝応制」（『全唐詩』巻46）に「金屋瑶筐開宝勝、花箋綵筆頌春椒（金屋の瑶筐　宝勝を開き、花箋の綵筆春椒を頌う）」とある。元日の祝いに酒に山椒の実を入れて飲む風習があった。

❼「樗材」…役に立たない材木の意で、無能な人物を言う。原欽自身を指す謙遜表現。

❼「斗山」…「北斗（北斗七星）」と五岳の一つ「泰山」。共に人々が仰ぎ尊ぶものを言う。宋・楼鑰の「送張定叟尚書鎮襄陽」（『攻媿集』巻2）に「南軒傳聖學、後進斗山仰（南軒伝聖の学、後進斗山の仰）」とある。

④現代語訳

夜半まで春風が吹いて、十二月も終わり
江戸の景色は新年に入った
ひさしの前を日が照らすと、真っ先に白梅が咲き
垣根の外に暖かさが戻ってくると、雪は自然に消えて行く
杯に新しい酒を注ぎ二日酔いを楽しみ
大皿に花を飾り長寿をもたらす春の山椒を称える
役立たずの私には人の仰ぎ見る徳はなく
我が君の雨露の恩をお受けするばかり

⑤備考

『復軒詩藁』「庚申延宝八年　時年十有五」に載せる。

10．漁郎

①原文及び書き下し文

㊗漁郎

❶賢翁逃世覚心清　賢翁は世を逃れ心清らかなるを覚え

❷江海扣舷凭濯纓　江海に扣舷（こうげん）して濯纓に凭（よ）る

❸破笠動注呉雪重　破笠　動（やや）もすれば注ぐ呉雪の重きを

❹経簑常凌楚雲軽　経簑　常に凌ぐ楚雲の軽きを

❺一竿獨釣其生理　一竿の独釣　其れ理を生ず

❻千里孤帆毎送情　千里の孤帆　毎に情を送る

❼何事昔時姜氏子　何事ぞ　昔時姜氏の子

❽風塵來往慕虚名　風塵来往して虚名を慕はん

②校異

❻原文は「帆」を俗字の「帆」に作る。

❽原文は「往」を異体字の「徃」に作る。

③語釈

㊗「漁郎」…すなどる人。漁師。陶淵明「桃花源記」に関連付けて詠まれることが多いが（「桃花源記」では「漁人」）、ここでは隠者、もしくは

隠君子のイメージで用いられている。明・朱誠泳「半村為姑蘇湯隠士賦」(『小鳴稿』巻 5) に「門前流水漁郎棹、道上飛埃使者車(門前の流水　漁郎の棹、道上の飛埃　使者の車)」とある。宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味』(ちくま学芸文庫 2018) の「Ⅰ山水画　第二章　漁師の意味、漁父の伝統」参照。

❷「江海」…長江と海。ここでは長江を意識した川の意。『楚辞章句』(巻 13「怨世」) に「寧為江海之泥塗兮安能久見此濁世 (寧ろ江海の泥塗と為るも安くんぞ能く久しく此の濁世を見ん)」とある。

❷「扣舷」…船端を叩いて拍子をとること。蘇軾「前赤壁賦」(『東坡集』巻 2) に「於是飲酒楽甚、扣舷而歌之 (是に於いて酒を飲みて楽しむこと甚し、舷を扣きて之を歌う)」とある。

❷「濯纓」…「纓 (冠をとめる紐)」を洗う。前出の「扣舷」とともに『楚辞』の「漁父」に「漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓 (漁父莞爾として笑い、枻(ふなべり)を鼓きて去る。乃ち歌いて曰く、滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯う可し)」とあるのを踏まえる。

❺「生理」…ここでは生計・生活を言う。杜甫「得舍弟消息二首　其二」(『杜甫詳註』巻之 4) に「生理何顔面、憂端且歳時 (生理何の顔面ぞ、憂端且つ歳時)」とある。書き下しは対句の「送情」にあわせた。

❻「千里孤帆」…孟浩然「宿永嘉江寄山陰崔少府国輔」(『全唐詩』巻 160) に「相去日千里、孤帆天一涯 (相去ること日に千里、孤帆は天の一涯)」とあり、「千里孤帆」は遠く離れた人や故郷への思いを喚起する。「千里」は概数で、遥か遠いことを言う。

❼「姜氏子」…太公望呂尚を言う。呂尚の本姓は姜氏。姜太公。『十八史略』(巻 1「周」) に、「子真是耶。吾太公望子久矣 (子は真に是なるか。吾が太公子を望むこと久し)」とある。

❽「風塵」…俗世間の喧噪。杜甫「奉陪鄭駙馬韋曲二首　其二」(『杜詩詳註』巻之 3) に「城郭終何事、風塵豈駐顔 (城郭終に何事ぞ、風塵豈に顔を駐めん)」とある。

❽「虚名」…うわべだけの評判・名声。

④現代語訳

賢い老人である漁郎は世の中を避けて心の清らかさを感じ
川で船端を叩いて調子をとり、「吾が纓を濯う可し」と歌う
破れた笠にはいつも呉の重たい雪が降り注ぎ
歳を経た簑は擦り切れて楚の雲よりも軽い
一人たらす釣竿は、生活を支え
遥か沖の舟から、家で待つ家族を思う
どうしたことであろうか、かつての太公望呂尚が
俗世間の喧噪の中を往来してうわべだけの名声を求めたのは

⑤備考

『復軒詩藁』未所収。

11. 秋林有感

①原文及び書き下し文

㊐秋林有感　秋林に感ずる有り

❶秋林以歩入荒蕪　秋林歩を以て荒蕪に入る

❷落葉蕭〃霜滿途　落葉蕭々として霜途に満つ

❸感慨花時如昨日　感慨す　花時昨日の如し

❹栄枯何事急相殊　栄枯何事ぞ急ぎ相殊(こと)にせん

②校異

❶『復軒詩藁』は「以」を「移」に作る。

❸『復軒詩藁』は「感慨」を「想得」に作る。

③語釈

❶「荒蕪」…荒れ果てた土地。

❷「蕭蕭」…物寂しい様。

❸「花時」…春を言う。羅鄴「牡丹」（『全唐詩』巻654）に「落尽春紅始著花、花時比屋事豪奢（春紅　落ち尽くして始めて花を著す、花時　比屋　豪奢を事にす）」とある。

❹「栄枯」…ここでは夏と秋との対比を表す。

❹「殊」…異なることを言う。殊異。

④現代語訳

秋の林を歩んで荒れ地に入った

落ち葉が物寂し気に散らばり、道は霜で満ちている

ああ、春は昨日のことのようだ

季節の栄枯はどうしてこんなにも急いで変わるのだろう

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

12. 中秋月

①原文及び書き下し文

㊐中秋月　中秋の月

❶今夜望中河漢晴　今夜の望中　河漢晴れたり

❷十分秋色満京城　十分の秋色　京城に満つ

❸可憐天上一固月　憐れむ可し　天上一固の月

❹能使人有吟骨清　能く人をして骨の清きを吟ずる有らしむ

②校異

㊐『復軒詩藁』は詩題下に「花山亜相藤公席上」の注を記す。

❸『復軒詩藁』は「固」を「輪」に作る。

❹『復軒詩藁』は「有」を「間」に作る。

③語釈

❶「河漢」…黄河と漢水。転じて天の川を言う。『文選』（巻29）所収「古詩十九首　其十」に「迢迢牽牛星、皎皎河漢女（迢迢たり牽牛の星、皎皎たり河漢の女）」とある。

❷「秋色」…秋の景色。

❸「可憐」…「4．冬夜讀書」参照。

❹「骨清」…「6．竹軒對雪」参照。

④現代語訳

今夜は晴れた空に天の川を望む

都はすっかり秋の景色

何ということだ、天に懸かる月が

俗気のない詩を人に詠ませるのは

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

13. 新雁

①原文及び書き下し文

㊐新雁

❶点〻南飛出塞城　点々として南に飛び塞城を出で

❷新來切作斷腸聲　新たに来たりて断腸の声を切に作る

❸莫言鴻雁不傳信　言う莫かれ　鴻雁信を伝えずと

❹月与故人無有情　月と故人と情有ること無し

②校異

㊐『復軒詩藁』は「花山亜相席上賦新雁」に作る。

❶『復軒詩藁』は「南飛」を「何時」に作る。

❸『復軒詩藁』は「莫」を「漫」、「不」を「違」に作る。

❹『復軒詩藁』は「月与」を「不識」に作る。

③語釈

㊐「新雁」…候鳥（渡り鳥）である雁は、秋になると越冬のために南に渡ってくる。その初めて渡ってきた雁を言う。

❶「塞城」…辺境のまち。『楽府詩集』（巻37）に載せる魏・武帝「却東西門行」に「鴻雁出塞北、乃在無人郷（鴻雁は塞北に出ず、乃ち無人の郷に在り）」とある。

❷「斷腸」…子猿を連れ去られた母猿が、その悲しみの余りに絶命し、その腸が一寸刻みにちぎれていたという『世説新語』（巻下「黜免」）に載せる故事に基づく表現。ここでは、雁の鳴き声が悲しげであることを言う。

❸「鴻雁」…もともとは大型のガンと小型のガンを区別して表していたが、後には雁の総称として用いられるようになる。

❸「不傳信」…「信」は雁が運ぶ手紙。雁信・雁書。『漢書』（巻 54「李広蘇建伝」）に「天子射上林中得雁。足有係帛書言武等在某沢中（天子上林の中に射して雁を得。足に帛書を係する有りて武等某沢中に在りと言う）」とあるのに由来する。杜甫「夜」（『杜詩詳註』巻之 17）に「南菊再逢人臥病、北書不至雁無情（南菊再び逢いて人病に臥し、北書至らずして雁情無し）」とあり、手紙をもたらさない雁を「無情」とする。

❹「無有情」…「有情」は、人としての心、義理・人情があること。前句を受けて、雁の「無情」を否定して月と故人の「無情」を言う。白居易「客中月」（『全唐詩』巻 435）に「夕與新月宿、誰謂月無情（夕べに新月と宿る、誰か謂はん　月に情無しと）」とあり「月」を「有情」であるとするが、原欽は逆に雁を「有情」と擁護する。

④現代語訳

多くの雁たちが塞北の地を出て南に飛び
新たな地に来ては慌ただしく腸をちぎるような悲しみの声をあげる
雁が無情にも手紙を運ばないなどと言ってはならない
情があるはずの月と友人も無情なのだ

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

14. 春遊安珍寺

①原文及び書き下し文

㊐春遊安珍寺　春に安珍寺に遊ぶ

❶鴨水之涯帝闕東　鴨水の涯　帝闕の東
❷主人會友楽融〃　主人友に会ひて楽しむこと融々たり
❸傳盃勝處塵情尽　杯を伝える勝処に塵情尽き
❹覓句禪房興味濃　句を覓める禅房に興味濃なり
❺雙鷺飜飛高閣外　双鷺は飜飛す　高閣の外
❻諸峯羅列一堂中　諸峯は羅列す　一堂の中
❼石欄點筆時回首　石欄に点筆して時に首を回らせば
❽滿面春光滿面風　満面の春光　満面の風

②校異

㊐『復軒詩藁』は詩題下に「勘解由小路拾遺同遊」の注を記す。

❸『復軒詩藁』は「盃」を「杯」に作り横に「盃」と記す。

③語釈

㊐「安珍寺」…未詳。安藤紀一は「詳ならず」とした上で、「鴨川近き所にある寺ならむ」とする[註6)]。

❶「鴨水」…鴨川。

❷「帝闕」…宮城。ここでは御所を言う。

❸「融融」…分け隔てなく打ち解け合う様。

❸「傳盃」…杯を回し呑む。杜甫「九日五首　其二」（『杜詩詳註』巻之 20）に「旧日重陽日、伝杯不放杯（旧日重陽の日、杯を伝えて杯を放たず）」とあり、仇兆鰲の註に『杜憶』を引いて「伝杯不放杯、見古人只用一杯、諸客伝飲（杯を伝えて杯を放たず、古人只だ一杯を用い、諸客伝え飲むを見る）」とある。

❸「塵情」…世俗の感情。明・黎民表「同梁思立鄧君肅梁少仲林開先宿梅庵」（『瑶石山人稿』巻 8）に「名山宜結夏、亦自断塵情（名山宜し

く夏を結ぶべし、亦た自ら塵情を断つ)」とある。

❻「諸峯」…以下に「一堂中」とあることから、実景としての山々ではなく、房内の山水障壁画であろう。禅寺における山水画は、「禅林の繁忙な生活をのがれて、隠逸な高士の生活を求めようとする禅僧たちの憧憬を表現したもの」[註7)]とされる。臨済宗大徳寺派大本山大徳寺の本坊に現存する障壁画を参照されたい。

❼「点筆」…筆を加える。ここでは詩文を作ること。梅花道人呉鎮の「題雲西画巻」(『元詩選二集』巻14）に「雲西老人清且奇、随意点筆自合詩（雲西老人清且つ奇、随意に点筆すれば自ら詩に合す)」とある。

④現代語訳

安珍寺は鴨川の汀、御所の東にある
寺の主人は友に会い打ち解け楽しんでいる
景勝で酒杯を回し呑むと俗世の感情が消え
禅房で詩句を求めると趣深くなる
高殿の向こうをつがいの鷺が舞い飛び
本堂には描かれた峰々が連なる
石の欄干のあたりで詩を作りながら首をめぐらすとあたり一面春の日差しと風に満ちている

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

15. 新燕

①原文及び書き下し文

㊐新燕

❶満城春色日方長　満城の春色日方(はじめ)て長し
❷燕子來飛期不忘　燕子来たり飛びて期を忘れず
❸可愛年〃尋舊主　愛す可し　年々旧主を尋ね
❹新巣未必卜雕梁　新巣未だ必ずしも雕梁に卜さず

②校異

❸『復軒詩藁』は「年〃」を「季〃」に作る。

③語釈

㊐「新燕」…春に新しい巣作りのためにやって来る燕。

❶「方」…「ようやく～になる」意。韓愈「次峽石」（『五百家注昌黎文集』巻 10）に「数日方離雪、今朝又出山（数日方て雪離れ、今朝又た山を出ず)」とある

❷「期不忘」…約束を忘れない。燕が時をたがえずに訪れることを言う。明・彭大翼『山堂肆考』（巻215「蟄井」）に引く『文昌雜録』に「世言、燕子至秋社乃去仲春復来（世に言う、燕子秋社に至りて乃ち仲春に復た来たる)」とある。

❸「尋舊主」…燕が毎年決まった場所に巣を作ることを言う。杜甫「春日梓州登樓二首　其一」（『杜詩詳註』巻之 11）に「双双新燕子、依旧已銜泥（双双たり新燕子、旧に依りて已に泥を銜(ふく)む)」とある。

❹「卜雕梁」…「卜」は「卜宅」の意で、住居を決めること。「雕梁」は美しく彫り物で飾られた梁。「雕」は「彫」に通じる。美しい梁の上に新たに住居を構えること。

④現代語訳

町中に春の景色が満ち溢れ日差しもようやく長くなってきた
燕は約束を忘れずにやってきた
何と愛しいことよ、毎年も以前の主人のもとを尋ね
美しい梁に新しい巣をかけるとは限らないのは

⑤備考

『復軒詩藁』「戊牛延宝六年　時季十有三」に載せる。

16. 春江

①原文及び書き下し文

㊐春江　春の江

❶楊柳風和春滿汀　楊柳風和み春汀に満ち
❷孤村烟雨封青〃　孤村の煙雨　青々を封ず
❸無人山下伴黄鳥　人の山下に黄鳥を伴う無く
❹有者佗郷歎白萍　者(ひと)の佗郷に白萍を歎(たん)ずる有り
❺一段暖光天合糺　一段の暖光　天合(あつ)め糺(あわ)せ
❻百般楽事醉還醒　百般の楽事　酔還って醒む
❼塵寰之分親塵俗　塵寰の分は塵俗に親しむ
❽此日留江忘影形　此の日江に留まりて影形を忘る

③語釈

❶「楊柳」…「楊（カワナヤギ）」と「柳（シダレヤナギ）」はもともと別の植物だが、詩歌では区別されることなく「楊柳」と呼ばれ、水辺のシダレヤナギを言う。

❷「烟雨」…あたりを霞ませる細かな雨。霧雨

❷「青青」…第一句の「楊柳」が春になり鮮やかに青々として見える様。李白「侍従宜春苑奉詔賦龍池柳色初青聴新鶯百囀歌」(『李太白集注』巻 7）に「池南柳色半青青、縈烟裊娜払綺城（池南の柳色半ば青青、烟を縈(めぐ)りて裊娜綺城(じょうだ)を払う）」とある。王維「送元二使安西」(『王右丞集箋注』巻 14）に「渭城朝雨浥軽塵、客舎青青柳色新（渭城の朝雨　軽塵を浥し、客舎青青　柳色新たなり）」と描かれる雨に濡れた柳の美しさが想起されるが、ここでは柳それ自体の青々とした姿を言う。

❸「黄鳥」…高麗ウグイス。黄色がかった褐色をした日本のウグイスよりやや大型の鳥。囀りの美しさで知られ、文人に愛された。

❹「佗郷」…「佗」は「他」に同じ。異郷、旅先。

❹「歎」…ここでは「ほめたたえる・称賛する」意。『礼記集説』(巻 63) に「孔子屢歎之（孔子　屢(しばしば)之を歎(たた)う）」とあり、鄭氏の注に「屢歎、美此礼也（屢歎とは、此の礼を美(ほ)むるなり）」とある。

❹「白萍」…晋・崔豹『古今注』(巻中「魚蟲第五」）に「白魚〈中略〉子好羣泳水上者、名曰白萍（白魚〈中略〉子の好んで群なし水の上に泳ぐ者、名づけて白萍と曰う）」とある。前句の「黄鳥」と色彩の対比を成す。杜甫「絶句六首　其四」(『杜詩詳註』巻之 13）に「隔巣黄鳥並、翻藻白魚跳（巣を隔てて黄鳥並び、藻を翻して白魚跳る）」とある。

❺「一段」…ひとくぎり。次句の「百般」と対比を成す。

❻「百般」…様々な種類。あらゆる。

❼「塵寰」…「1．士峯」参照。

❼「分」…ここでは去声に読み、本分・決断の意。『文選』(巻 45）に載せる班固「答賓戯」に「烈士有不易之分（烈士に不易の分有り）」とあり、李善の注に「分決也（分は決なり）」とある。

❽「形影」…身体（形）と常にそれに寄りそう影。李白「月下獨酌四首　其一」(『李太白集注』巻 23）に「挙杯邀明月、対影成三人（杯を挙げて明月を邀え、影に対して三人と成る）」とある。

④現代語訳

柳を吹く風が和らぎ、春の気配が川辺に満ちる溢れる
ぽつんとした村に降る霧雨が、春の青々とした柳をつつみこむ
山の麓にウグイスを伴う文人はいないが
他郷にあって白魚を褒める旅人はいる
春の暖かな日差しは天が集めまとめ
様々な楽しみは酔いがかえって醒ます
俗世間の本分は世俗に親しむこと
今日はこの川辺に留まり我が身のすべてを忘れてしまおう

⑤備考

『復軒詩藁』未所収。

奥書

①原文及び書き下し文

❶延宝庚申春　延宝庚申の春

❷博約堂人山田言歆把毫洛下

博約堂人山田言歆　毫を洛下に把る

❸時年十有五

時に年十有五

③語釈

❶「延宝庚」…延宝 8（1680）年。

❷「洛下」…京都を言う。原欽は延宝 8 年を江戸で迎えたが、2 月には京都に戻っている。安藤紀一は「二月十五日に近き頃に、近江國を過きて京師に入りたるべし」とする[註8)]。

④現代語訳

延宝 8 年の春、博約堂人の山田言歆は京都にて筆をとった。時に十五歳。

［註］

註 1…『近世大名文芸圏研究』（八木書店 1997）pp.254～255

註 2…『山田原欽』（明倫同窓会 1940）p.5

註 3…『復軒詩藁』（山口県立図書館蔵）

註 4…異体字・俗字・略字については山田勝美監修『異体字解読辞典』（柏書房 1987）に拠った。

註 5…富士山本宮浅間大社のホームページに拠る。

註 6…前掲『山田原欽』p.36

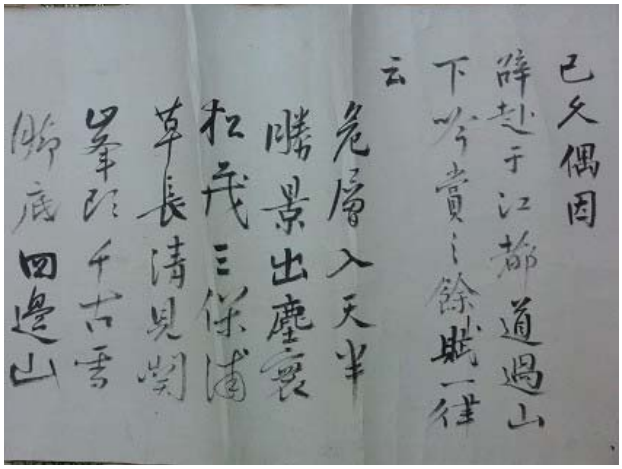
註 7…松下隆章編『日本の美術　No.13　水墨画』（至文堂 1967）p.34

註 8…前掲『山田原欽』p.54

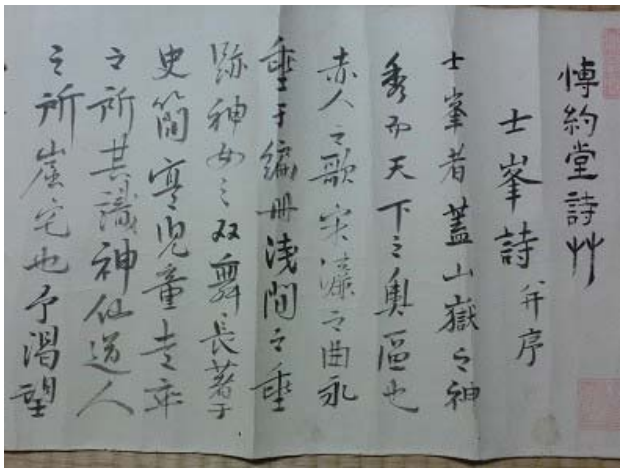
謝辞

今回、貴重な資料の閲覧及び写真のご提供に加えて、研究紀要への掲載を御快諾頂きましたことに心より感謝申し上げます。

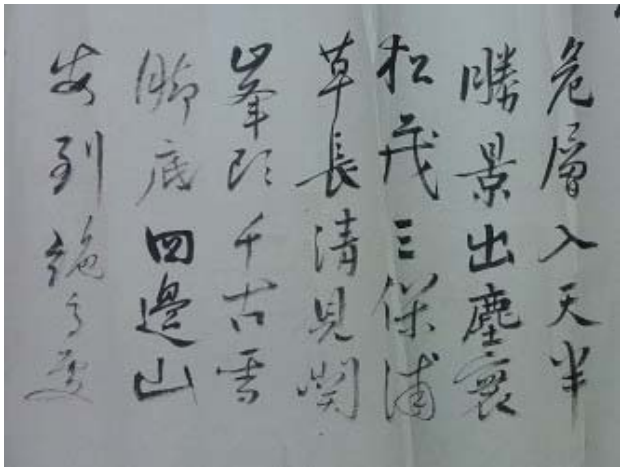
「博　約　堂　詩　艸」



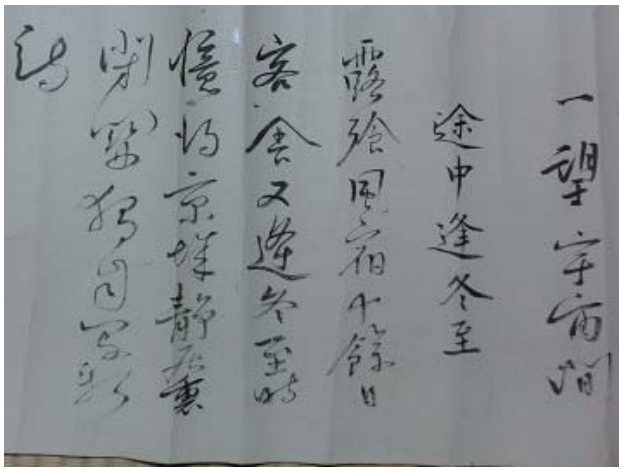
(2)



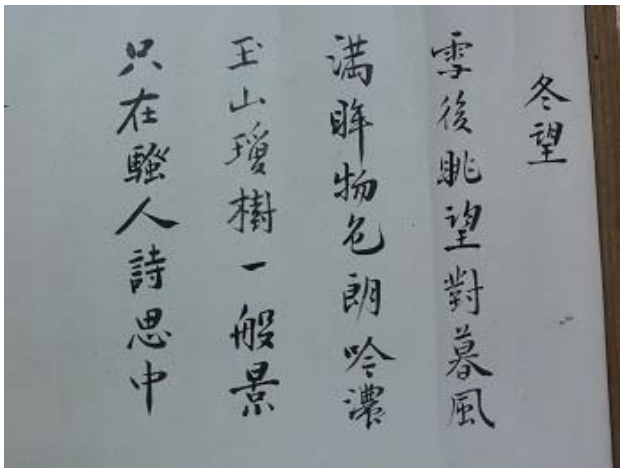
(1)



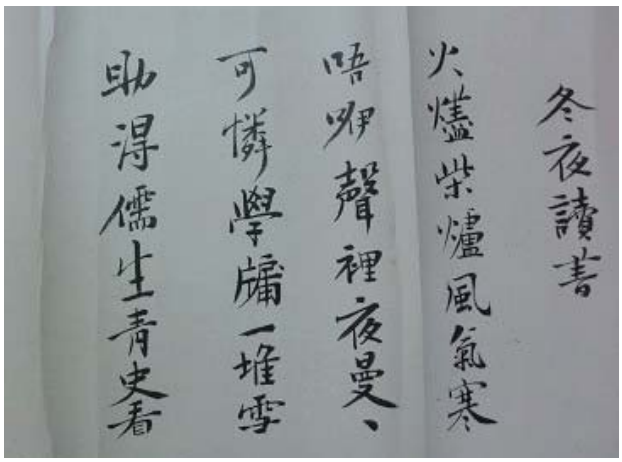
(3)



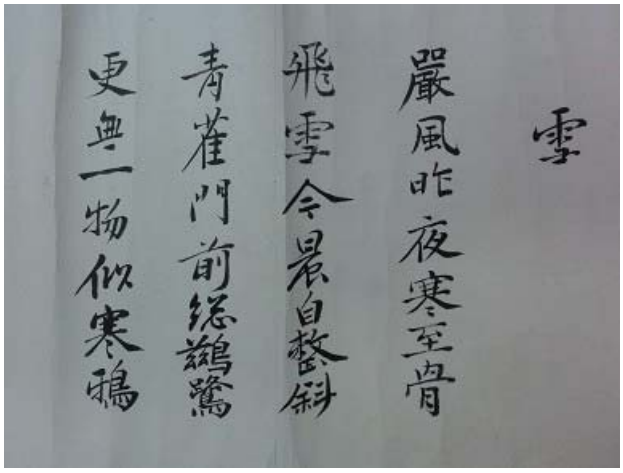
(4)



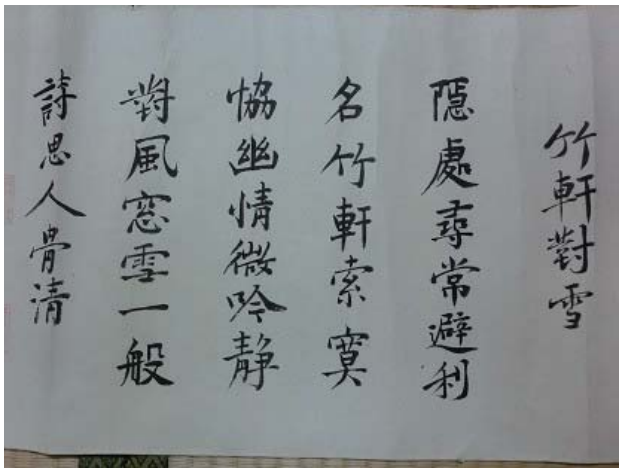
(5)



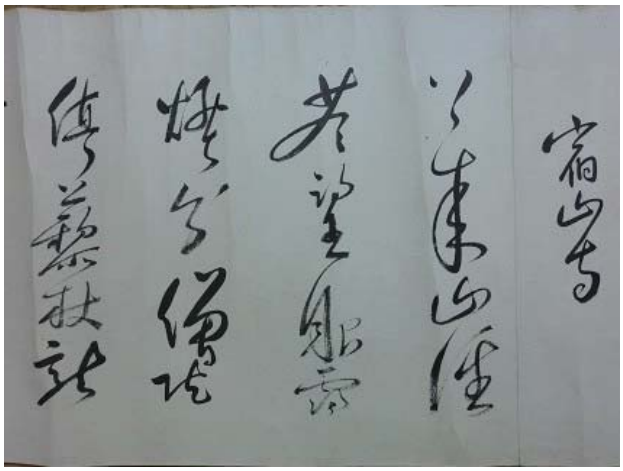
(6)



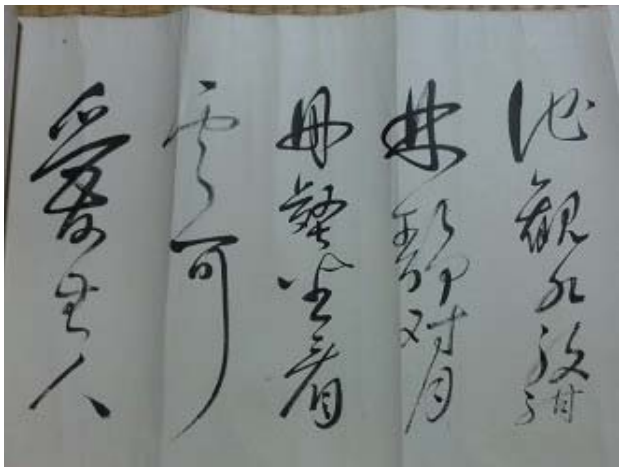
(7)



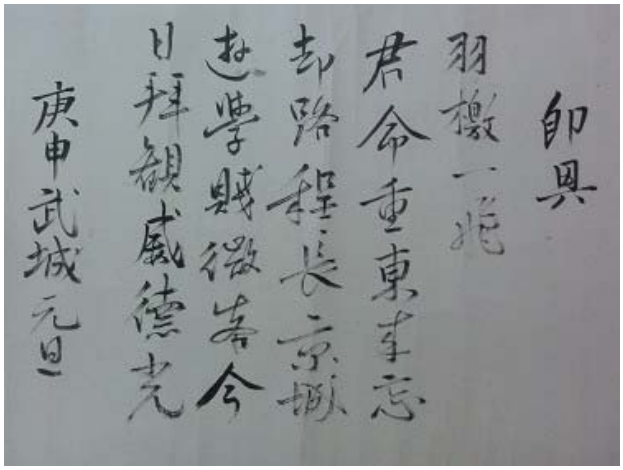
(8)



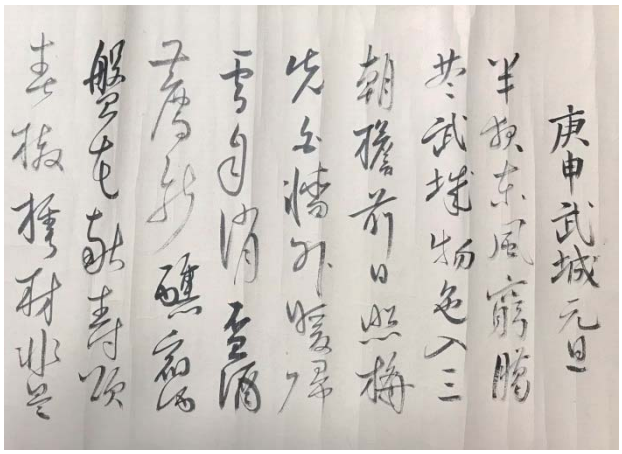
(9)



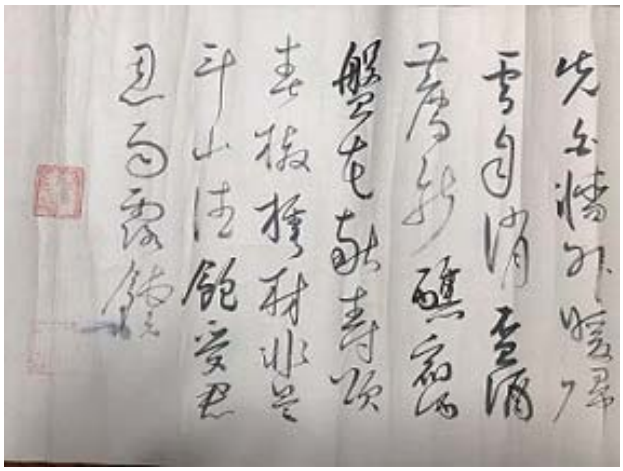
(10)



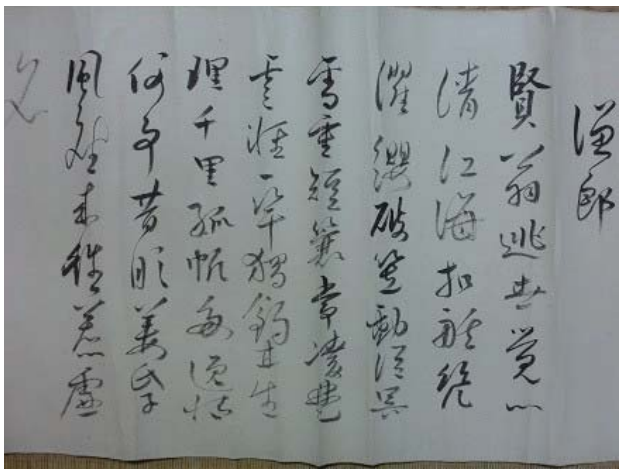
(11)



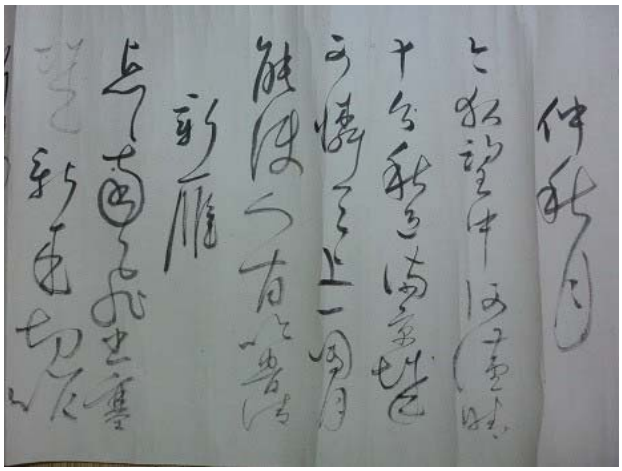
(12)



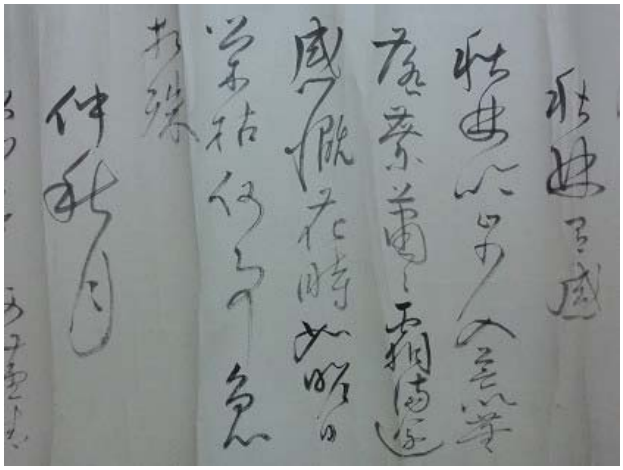
(13)



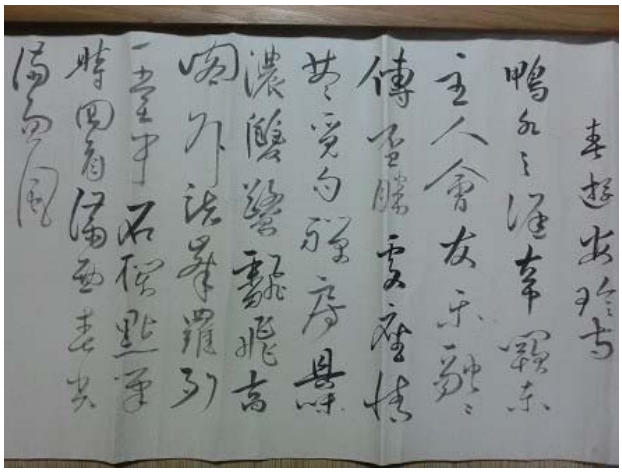
(14)



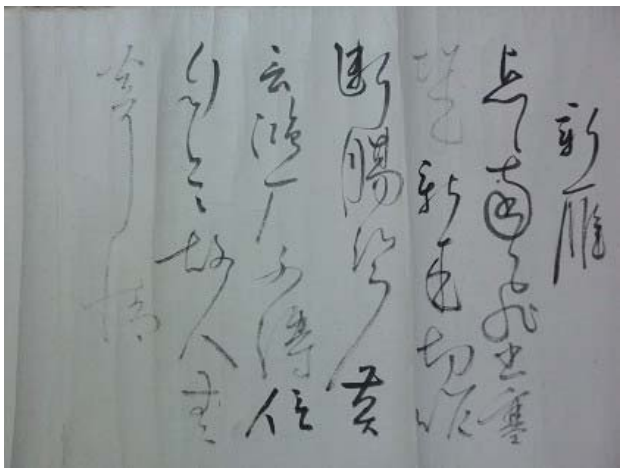
(16)



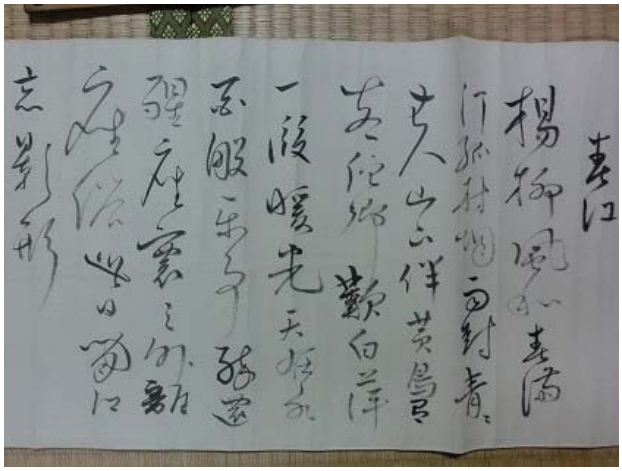
(15)



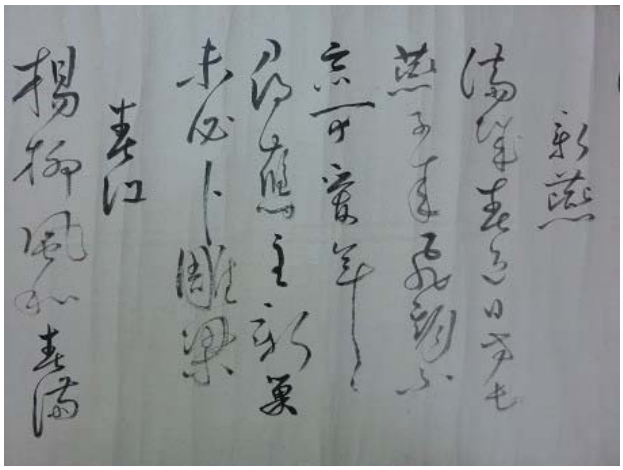
(18)



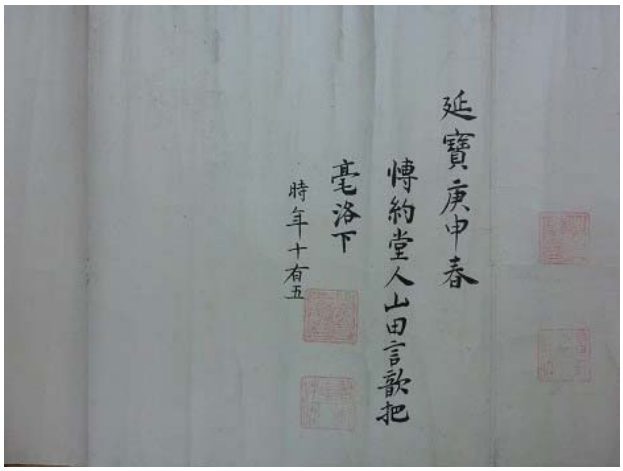
(17)



(19)



(18)



(20)